

【序論】と【第1部 一般原理】の簡単なまとめ

【序論】

(1) ラングについてだけ取り組む

- ・ランガージュ……物理的、生理的、心的、個人的、社会的領域にまたがる (p23)
- ・ラング……社会的。個人の集合の脳の中に存在。**心的だが抽象的な観念ではなく具体的対象** (p34)。
 ……→ 町田は「記号もラングも抽象的」としている (注81 p34)。

$1 + 1 + 1 + \dots = 1$ (1: 個人の脳の中にあるラング、1: 集合の中にあるラング)

- ・パロール……個人的。心的・物理的。

$(1 + 1' + 1'' + \dots)$ [右辺なし] (1, 1', ……: 個々のパロール)

- ・ラングとパロールは相互に依存する関係であり (p40)、議論が循環し記号学が成立しなかった (p36)。
 ……→ラングの言語学だけに組み込んでいく (p41)。

【第1部 一般原理】

(1) 記号の定義と原理

- ・言語記号……概念 (シニフィエ) と聴覚映像 (シニフィアン) の結合体 (p102)
心的な実体 (p101) (▶**心的実在体** (小林英夫訳・岩波書店)) 【以下▶は小林英夫訳】
 (聴覚映像……物理的な音ではなく音の心的な刻印 / 概念……聴覚映像よりは抽象的)
- ・第1原理……結合の恣意性 (必然性がない、動機づけがない、無契性)
- ・第2原理……シニフィアンの線状性 (時間の線)

(2) 共時態の研究から始める

- ・ラングは、不変 (第2章第1節) かつ可変 (第2節) だから、同時に研究できない。
- ・発話主体は「状態を目にする」だけだから、「過去を消し去らなければ、**発話主体の意識に入り込む**ことはできない」 (p119)。研究の方法はすべて**発話主体の証言を収集することにある** (p130)。

(3) 個々のラングと根本的な単位 (恒常的な原理)

- ・研究の対象は、固有語=個々のラング (フランス語、英語……) だが、どの固有語にも「その全てに一定の**恒常的な原理**があると仮定され、諸固有語が示す相違の中に、**根本的な単位** (▶ふかい統一) が隠されている」 (p142)

【第2部 共時言語学】で語られていること

- ・第2章……ラングの中に具体的な単位となる実体が存在することは間違いないが、それを見つけるのは難しい。
- ・第3章……私たちがいるものとあるものが同一だと考えるとき、実は、実在や価値の問題に触れている。
- ・第4章……(第1節)ラングとその単位の形成について述べる。以下は単語について考える。
 (第2節)ラングが価値の体系であることを説明する。人は単語の意味と価値を混同している。
 (第3節)単語の音(や文字)も、他との差異によって決まる「否定的」なものである。
 (第4節)以上を基礎にして、言語の「肯定的」本質や通時的事実や文法的事実を捉え直すことができる。
- ・第5章……人が言葉を使うとき、上に述べた価値の体系は、連辞と連合という2つの関係の中で機能している。
- ・第6章……ラングは、連辞と連合が組み合わさって機能している。ここから単語(や各言語)の多様性が生じる。
- ・第7章……上記観点から、いままでの文法やその中での区分を検討する必要がある。
- ・第8章……文法概念 (格や品詞や語順) は、抽象的な実体として存在しているが、これらも具体的な実体に基礎を置いている。

第2部 共時言語学 (p143~p193)

第1章 総論

- (1) 共時言語学の目的は「ラングの状態」を構成する要因を解明すること。
- (2) 「ラングの状態」は近似的でしかありえない。

第2章 ラングの具体的な実体

第1節 実体の単位 定義

(p146.1) ラングを構成する記号は、抽象的存在ではなく、具体的な対象である (p.34参照)。
記号は「**具体的な実体**」と呼ぶことができる。

① 言語的な実体は、連合（結合）によってのみ存在

(1) 連合（結合）を考慮しないとき、それは抽象的。

- ・観念の媒介のない「音連鎖」は、言語学にとっては抽象的な存在（生理学にとっては研究の材料）
- ・シニフィエも、シニフィアンから分離されると抽象的（心理学の対象になる）

(2) 抽象的存在 (▶抽象物) と具体的な実体 (▶具体的実在体)

↓「抽象」「具体」「実体」に関して、

【(注81)で町田は、「記号も抽象」「ラングが具体的な対象であることはありえない」とし、記号が「具体的な実体」とされているのは、言語学の根拠を確保するためと推測している。しかし、本文の「抽象」「実体」等から受ける印象は、具体的な実体 = 「話者にとって具体的なもの（話者は抽象的操作などしない）」ではないか】
(例) p159.21 「(思考と音を切り離すこと) もしそれができるとすれば**抽象的**な操作をするしかないが……」

② 言語的な実体は「その境界が定められた」時に「単位」として確定

(1) p147.5 「最初は……」【意味不明】…→▶「ひととはとすれば……」

(2) 音連鎖（それ自体）は、切れ目のない帯。これを区切るためには意味の助けが必要。

(3) ラングは、前もって境界が画定された記号の集合として提示されているのではない。

(4) **単位の定義**……「音響の断片であって、発話連鎖でこれに先行する部分と後続する部分から分離される、何らかの概念に対応するシニフィアンであるもの」

第2節 境界設定の方法

《単純な設定方法（「同じ概念」かつ「同じ音的断片」⇒同じ単位）》

(1) 例えば、sizlapra は、概念によって、si-je-l'-apprendes と si-je-la-prendes のどちらかに区分される。ところがこの方法で、単位が正しく設定されていることを確認するためには、同じ単位が現れる一連の文を比較し、**どの場合にも**この単位を分離することができなければならない。

(2) 【上のような確認ができたとしても?】 fors (force) はある単位にも、別の単位にもなる。

第3節 境界設定の実際的な難しさ

(1) 単語 = 単位ではない

- ・cheval (馬) とその複数 chevaux は、意味も音も異なる
- ・mois (mwa) と mois (mwaz 語末が有声化) は、意味は同じ (月) だが、音は違う

↓すなわち、

これらが異なった単語とするか、【ここには】具体的な単位があるとはしないで、異なった形態を結合する**抽象的な操作**があるとするかである。後者の場合には、単語以外のところに具体的な単位を求める必要がある。

- ・派生語、複合語、熟語、活用形などの問題もある。

(2) 発話主体と学者

発話主体はこのような困難を知らない。何らかの程度で意味を表すものはすべて、**具体的な単位として理解され、談話中ではこれらを間違いなく識別する**。しかし、……分析によって単位を理解することは、別のことである。

(3) 文を単位とすることはできるか

かなり広まっている理論では、具体的な単位は文であると主張されている。しかし、もし文がパロールに属しているのだとしたら、単位だと見なすことはできない。また、文が単位だとしても、多様な文から共通なものを見いだ

そうとすると単語の問題になる。

第4節 結論

- (1) 多くの学問において、……単位は、直ちに与えられているか、本質的ではないものである。
- (2) 言語……最初から知覚できる実体は提示されないのだが、それでもそのような実体は存在していて、ラングを構築しているのは、それらの働きであるという、不思議で顕著な特徴がある。

第3章 同一性、実在、価値

(p152.1) 静態言語学では、あらゆる最重要の概念が、単位についての考えに依存していて、この考えと混同されさえする(▶混同しさえする)。以下では、同一性、実在、価値の概念について説明していく。

A. 共時的な「同一性」とは、何だろうか

- (1) 《je ne sais pas》〈私は知らない〉と《ne dites pas cela》〈そのことを言わないでください〉の2つの文が、同じ要素 pas を含んでいるとする、同一性。

↓

同じ音響の断片(pas [pa])が、同じ意味を表しているから、同一性はありそうではある。しかし、この説明では不十分である。なぜならば、音の断片と概念の対応が同一性の証明になるとしても、その逆は真ではない。

- (2) Messieurs! と2度言うときの同一性

……音(口調や抑揚)や意味が違って「これらが同一だ」という意識がなくなることはない

- (3) 同一性の問題と実体や単位の問題との関係

(p153.12) 同一性の問題は、実体や単位の問題と部分的には**混同されている**。後者の問題は前者の問題を複雑にしたに過ぎないのだが、しかし実りの多いものである。▶「それ(同一性の問題)は、実在体および単位のそれと部分的に**混同し**、その複雑化した・しかもみりおおいものにほかならない」

↓

【つづく急行その他の例が示すのは、「同一」は「実体」や「単位」と関係する「実り多い」問題だということなので、小林訳が正しいと思う。また「**混同**」が与えるイメージが両者で異なる…→第4章第4節(4)(5)】

- (4) 「ジュネーブ発パリ行き午後8時45分」の急行2本に関する同一性

……急行を作っているのは、出発時刻や行程など、それを他のすべての急行から別する状況。

同じ条件が実現される度ごとに、同じ実体が得られる。

- (5) 街路

↓

【同一の急行や街路は実在する。単位として、かつ、物質的な実現として】

- (6) 服

↓

(p154.6) 言語的な同一性は、服の同一性ではなく、急行や街路の同一性である。私が Messieurs! という単語を使う度にその材料(発声行為・心理的活動)は新しくなる。**2度使用された同じ単語の結びつき**は、物質的な同一性や意味の類似性ではなくて、これから探究する必要があり、言語的な単位の性質と密接な関係を持つ要素に基づいている。

B. 共時的な「実在」とは何だろうか。

- (1) たとえば、品詞は、共時的な実在ではない。
- (2) ラングに属する具体的な実在が、観察者の目に自ら現れ出てくることはない。
- (3) もし**実在**を捉えようとするならば、**現実と接触**することになる。
「品詞は論理的な範疇に対応しているからラングの要素」と言うことは、現実を無視している。
(音的な質料から独立している言語的事実は存在しない)

C. この節で触れたすべての概念は、別のところで「価値」と呼んだものと本質的には違いがない。

《チェスとの比較》

ある駒が試合の**現実的で具体的な要素**になるのは、価値を与えられて、その価値と一体となったとき。その駒は別の物に交換できる。それに**同じ価値**を認めさえすれば、**同一のものだと宣言**できる。

↓つまり

同一性の概念が価値の概念と**混同され**、また**その逆も同様**であることが分かる。

▶「同一性の概念と価値のそれとは、**たがいに、混同**することがわかる」

↓

以上のような理由で、**価値**の概念は、**単位、具体的実体、実在**の概念を**包含**している

▶「つまるところ、価値の概念は、単位、具体的実在体および実在のそれと**符合**する」

《単位が重要であるにしても、価値から問題に取り組む》

研究を実践するという観点からすると……単位から始めるのが有利だと思われる（▶おもしろかるう）。そのためには単語への分割の根拠がどこにあるのかを探究する必要があるだろう。なぜならば、単語は、精神に不可欠に訴えかける単位であり、ラングの機構における中心的なものであるから。

↓しかし

単位が最も重要ではあるにしても（▶重要きわまりないものではあるが）、価値の側面から問題に取り組む方が望ましい。なぜならば、価値の方が、この問題の根源的な側面だと思われるからである。

第4章 言語的価値

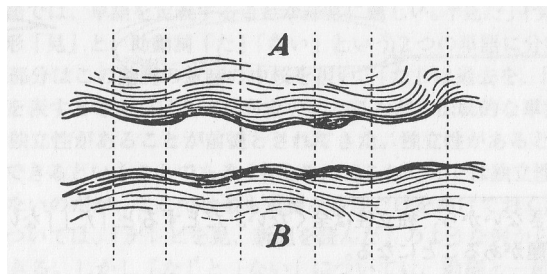
第1節 音的質料で組織される思考としてのラング

(1) ラングが純粋な**価値の体系**でしかありえないことを理解する**ためには**、観念と音を考察すれば十分である。

(2) 思考……星雲のようなもの。あらかじめ確定している観念はない。

音……柔軟な物質で、**区別された部分**に自分の方から分かれて、思考が必要とするシニフィアンを提供する。

(3) ラング… (A) 混沌とした観念が作る不定の平面、(B) 音を作る不明確な平面、の両方にまたがる、互いに隣接した下位区分。



(4) ラングが思考に対して果たす役割

- ・観念を表現するための音的手段を作ることではなく、思考と音を媒介すること。
- ・思考と音の結合体が、単位の境界を相互に確定する。
- ・思考が物質化されることも、音が精神化されることもなく、「思考と音」が区分を意味し、2個の不定形の塊にまたがって形をなしながら、ラングがその単位を精密に作り上げていく（ある種神秘的な事実）。

↓

空気、水、波動の例

(5) ラングは1枚の紙。表面（思考）を切ろうとすれば、同時に裏面（音）も切らなければならない。

(p159.21) 思考から音を切り離す…、音から思考を切り離すこともできない。もしそれができるとすれば**抽象的**な操作をするしかないが、その結果は純粋な心理学あるいは純粋な音韻論を実行することになる。

↓したがって

言語学は、これら2つの種類に属する要素が結合する、境界的な領域で作業を実行することになる。

そして「この結合が作り出すのは形式であって、実質ではない」。

▶「この結合は形態をうみ、実体をうみはしない」

(6) (2) ~ (5) の見方が、記号の恣意性 (p102) をよく理解させる。
 (理由) 記号が恣意的でないとなれば、**価値**の中に外部から強制された要素 (何か) が含まれることになる。
 しかし、**実際のところ、価値は相対的**。だから、記号は恣意的。
 【(1) 「ラング=価値体系を理解するため」だったはずが、「記号=価値」がすでに前提されている。】

(7) 「記号の恣意性」から「社会的な事実だけが言語体系を作り上げる」こともよく理解できる。
 (理由) **価値**は、慣用と一般的な合意によってしか存在しないから。【(6)に同じ】

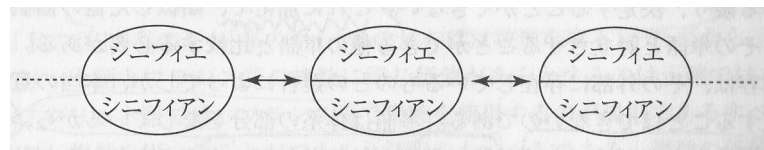
(8) **このように規定された価値の概念によって**、ある項目を単に**一定の音と一定の概念の結合体**と (▶たんにある音とある概念が合一したものだけに) 見なすことは幻想だということが示される。これは、項目から出発して、それらを合計することで体系を構築することができるように考えるようなものである。実際は逆で、**連結**により構成される全体 (▶連带的全一体) から出発しなければならないのであって、そこから分析によって、全体に包含される要素が得られるのである。
 【(1) ~ (5) 「記号とは→(ラング=価値体系)」だったはずが、(6) (7) を経て、(8) 「価値→記号とは」へと、話の方向が逆転している (次の第2節の先取りか)】

(9) (今後は) 単語について考察する
 (p160) ラングの**具体的な実体**、つまり**単位を直接捉えることはできない**ので、**単語**について考察を行うことにする。単語は、言語的な単位の定義と正確に合致しないが (p.149参照)、少なくとも**近似的な観念**を示すので、**具体的であるという利点を持つ**。……同じ資格を持つ**見本 (▶標本)**として、単語を取り上げることにする。

第2節 概念的側面から考察された言語的な価値

《「意味 (▶意義)」と呼ばれるものと価値との違い》

- (1) 「**意味**」というとき、ある記号の聴覚的映像に**対立する部分 (▶反面)**のことが思い描かれる。
- (2) しかし、その記号そのものが、他の記号に**対立する部分**である。
 ある項目の**価値**は、他の項目が同時に存在していることから生じてくる。



【問題】意味と価値の混同はなぜ起こるのか。

↓この問題に答えるために

ラングの外部においても、すべての価値がこの逆説的原理に支配されているように見えることを確認する。

《価値を構成しているのは、》

- ① 「置き換える」ことができる「類似していない」もの
- ② 「比較する」ことができる「類似している」もの

↓

(1) 5フラン貨幣……①一定量のパンとの交換、②1フラン貨幣との比較

(2) 同様に、単語……①観念との交換、②他の単語との比較 → ①が「意味」、価値は①+②で決定される。

↓

【「意味と価値の混同はなぜ起こるのか」に対する回答としては「②を忘れるから」か。】

(例) ・mouton (仏) と sheep (英)

……同じ意味を持っていると考えることはできるかもしれないが【本当はできない→p165.13】、
 価値は違う。

- ・同一言語内の隣接観念単語群
- ・単語について言えることは、文法についても言える (仏語の複数とサンスクリット語 (双数をもつ) の複数)
- ・異なる言語間に価値の正確な対応はない (単語、時制、アスペクト)

(p165.3) **価値の最も正確な特徴は、他の価値がそうであるものではない**ということなのである。

(p165.13) 他の価値②が存在しなければ、その価値は存在せず、その意味①も存在しない

↓

【《価値を構成》するのは、「①かつ②」ではなく「②のみ」と修正されるべきか(否か)】

【別々のラングに属する単語 mouton (仏) と sheep (英) や文法の相違を取り上げて、ラングなるものの恒常的原理を導いている。これが、p142 で言われていたことの実例のひとつではないか】

第3節 物質的な側面について考察された言語的価値

- (1) (p165.12) 単語において重要なのは、音それ自体ではなく、他のすべての単語から区別する相違である。意味を担うのはこの音的相違だからである。
- (2) (p165.-2) 項目 a と b が、そのまま意識に到達することは根本的に不可能であり、意識には、差異 a/b しか知覚できない。…→ 項目は意味とは無関係に変化する。
(例) チェコ語の zena (女・主格) : zenъ (複数属格) …→ zena : zen
- (3) (p166.-12) 音(物質的な要素)は、ラングにとっては道具として使われる材料に過ぎない。
↓
- (4) (p166.-4) シニフィアンは**音的なもの**ではない。それは形のないものであり、物質的な実質によって構成されているのではなく、差異のみによって構成されているのである。
- (5) (p167.1) (どの固有語においても)、どの**音的要素**も明確に定まった単位を形成しており、その数も完全に決まっている。**音的要素**を特徴づけるのは、単に要素が互いに混同されないという事実。**音素**はとりわけ対立的、相対的、否定的な実体である。(例) フランス語の「r」の発音
- (6) (p167.-2) 文字表記における同じ事情

第4節 全体として考察された記号

- (1) 結局、ラングにおいては、「肯定的な項目を持たない」差異しか存在しない
↓しかし
すべてが否定的だと言っても、それが当てはまるのは、シニフィエとシニフィアンを別々に捉えた場合だけである。記号を全体として考えようとする、**秩序を持った肯定的なもの**が見えてくる。
↓
(p169.11) 一定数の聴覚的記号が、思考の塊の中で形作られた同じ数の断片に**結びついているという見方から、価値の体系が生じてくる**。そして、それぞれの記号の内部で、音的要素と心的要素の間の**実効性のある結合を構成するのは、この体系**である。
- (2) シニフィエとシニフィアンは、それぞれを別個に考えると、**純粋に差異的で否定的なものであるのだが、両者が結合すると、それは肯定的な要素となる** 297)。これこそが、ラングに含まれる唯一の種類の事実で(▶でさえ)ある。**言語的な制度の本質は、これら2つの種類の差異の間にある平行関係を保持すること**だからである。

注297) ……体系を構成する要素の価値はともかくとして、**存在までが否定されると、ラングそのものの存立が危うくなる**。恐らくこのような理由で、先行する記述とは矛盾するように見える記号の肯定性を導入したのではないかと推測される。
- (3) この点(**2つの種類の差異の間にある平行関係を保持**)に関する特徴的な通時的事実
 - (ア) 〈音変化→観念の変化〉
音変化によって2つの項目が混同されるようになった場合、観念も混同される傾向にある。(逆に単一の項目が)複数の項目に分化することはあるだろうか。生まれた相異は、意味の相異にも関与することになるのだが、いつもうまく行くととは限らないし、うまく行っても最初からすぐにそうなるわけでもない(▶が)。
 - (イ) 〈観念の変化→音変化〉
これとは逆に、観念的な相異は、異なったシニフィアンによって表現される方向に向かい、精神がもはや区別しなくなった2つの観念は、同一のシニフィアンの中で混同される方向に向かう。
 - (ウ) 〈肯定的な項目としての記号〉
肯定的な項目としての記号を相互に比較しようとする(▶比較するやいなや)、今度はもう**相異**が問題ではなくなる。……なぜならこれ(肯定的な項目としての記号の比較)は、2つの聴覚映像(▶チチとハハ)、あるいは2つの観念(▶「父」と「母」)の比較にしか当てはまらないからである。それぞれシニフィエとシニフィアンを含む2つの記号は、**異なっているのではなく、ただ区別されている**……つまり、**これらの間には「対立」しかない**ということである。
【全体 — (差異) → 単位 — 肯定的項目 → 比較 → 2つ (の項目の比較) → 2つの項目の対立】

(4) (p170.-4) 差異化の原理を単位に適用すると次のように定式化される。

「単位の諸特徴は、単位それ自身と**混合する**(注299)」。

▶ 「単位の諸特質は単位そのものと**混同**している」

【「単位 ① は「他の単位 ② ③……との差異」」…→ 単位 ① (の特徴)は単位 ② ③……によって決まるが、単位 ② や ③ その他は 単位 ① その他によって決まる。ゆえに 単位 ① (の特徴)は単位 ① その他によって決まる。】

(5) (p171.2) 「文法的な事実」と呼ばれているものも単位の定義に対応する

(例) ドイツ語の Nacht : Nächte は、体系内部で**対立**の働き全体によって作り上げられている。

↓

この対立において機能している単位はどんなものになるのだろうか (▶と、問うてみよう)。

↓

(p171.-10) もし言語記号が差異以外のもの【**単純なもの**】によって構成されているのだとしたら、単位と文法的事実が**混同**されることはないだろう。

▶ 「**混同**することはないはずである。」

【Nächte が「複数」である文法的事実は、(i) 他の単語との差異によって決まるが、(ii) 他の単語は Nächte を含む単語との差異によって決まる。すなわち、Nächte の特徴は、Nächte 自身と「混合(混同)している」。これを一般的に言うと、文法的事実は単位(の問題)と「混同している」。ところが、たとえば ä が名詞の複数を決めるといったように、「単純なもの(原子や分子のような)」によって言語が構成されているのだとしたら、(i) (ii) のような問題は起こらない。つまり「混同」自体がない。…→小林訳が正しいと思うが】

↓しかし

単純なものが見つかることはない。相互に条件づけ合う項目が形成する、複雑な平衡が見つかるだけである。

↓言い換えれば、

(6) (p171.-6) 「ラングは形式(▶形態)であって実質(▶実体)ではない」

言語学用語の誤りは、言語現象の中に実質が存在すると、無意識のうちに仮定してきたこと(である)。

第5章 連辞関係と連合関係

第1節 定義

《言語的な項目間の関係は、2つの領域で展開》

(1) 連辞関係……談話において、2つ以上の連続する**単位**により構成される。「現存」のもの。

(例) **単語** re-lire 〈読み返す〉、文 nous sortirons 〈私たちは出発する〉など

ある項目が価値を獲得するのは、先行する項目または後続する項目、あるいはそのいずれもと対立しているからである。

(2) 連合関係……談話の外部において、何らかの共通点を待つ複数の単語が、記憶の内部で群を形成する。

「不在の」項目を結びつけるもの。

(例) enseignement 〈教育〉は、多くの単語(enseigner 〈教える〉、armement 〈武装〉など)を、無意識のうちに思い浮かべさせる。

第2節 連辞関係

《「文はラングに属さない(p32)」のに「文(連辞の典型)がラングに属する」とはどういうことか?》

↓

・パロールの本性は「組み合わせが自由」。

・ラングに属する連辞…… (1) 決まり文句など、慣用で定まっているもの

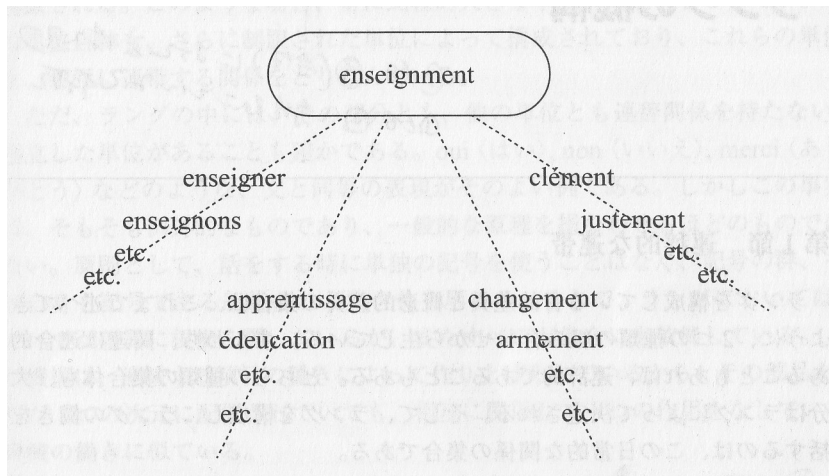
…… (2) ラングに登録されている多くの事例から規則的に作られる文

↓しかし

連辞の領域では、ラングとパロールの明確な境界はない。

第3節 連合関係

連合関係をつくるもの……共通の語根や接尾辞、シニフィエの類推、聴覚映像の共通性など、順序も個数にも限定がない（名詞や動詞の活用表の場合は個数は決まっているが）。



第6章 ラングの機構

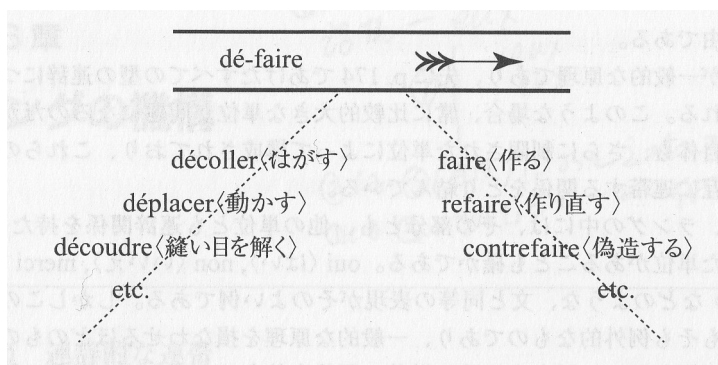
第1節 連辞的な連帯

《 単語の形成法（連辞的な連帯の例） 》

（例）desireux〈望んでいる〉…… desir x eux（下位単位の積）

- ・接尾辞 eux は、chaleur-eux〈熱烈な〉、chanc-eux〈幸運な〉…… が地位を与える。（P通り）
- ・語根 desirも、接辞がなければ存在できない。desir-1、desir-2、3-desir……（Q通り）
→ desireux〈望んでいる〉は、P×Q通りの組み合わせによって、価値を与えられている。

第2節 2つの形態の集団の同時的な機能



- (1) もし de や faire を含む他の形態がラングから消滅したとしたら、defaire はこれ以上分解できない。
- (2) (p180.-2) marchons!〈進もう〉と言う時には、連合関係のさまざまな群を無意識のうちに想起するのであるが、それらの群が交差するところに、連辞 marchons! が存在している。
↓したがって、
(p181.9) 表現したいことを意味するために mar-chons! を選ぶと言うだけでは不十分である。観念が呼び起こすのは、隠れているすべての体系（▶潜在的体系全体）であって、この体系によって、必要な対立を獲得することができる。marchons! に対する marche! marchez! がなくなっている日が来るとしたら、marchons! の価値は変化するだろう。
- (3) (p181.-7) このような手続きは、最小の単位、そして価値が与えられている場合には、音韻的な要素までも統率している。…… (p182.2) 例えば、ギリシア語で、[m、p、t] が決して語末に現れることができない

のだとすると、それは、ある位置にこれらの音があること、またはないことが、単語や文の構造において重要性を持つと同じことになる。そしてまた、このような種類に属するあらゆる場合において、単独の音も、他のすべての単位と同様に、頭の中にある二重の対立の結果として選択される。例えば、[anma] という想像上の群で、[m] という音は、その周囲にある音と連辞的な対立をなしていると同時に頭の中で想起されるすべての音と連合関係をなす。これは、次のように図示される。

a n m a
v
d

第3節 絶対的恣意性と相対的恣意性

- (1) vingt <20> は無契的であるが、dix-neuf <19> は同程度に無契的ではない。
(後者では、dix <10>、neuf <9>、vingt-neuf <29>、などが想起されるから)
- (2) 英語の複数形 ships <船> は、その形成法から、flags <旗>、birds <鳥> など、複数形全体を想起させるが、men <男たち>、sheep <羊たち> は、何も想起させない。
- (3) 有契的な記号であっても、その要素自体は恣意的であるだけでなく、項目全体の価値は、部分の価値の合計(加算)ではない(積である)。
- (4) (p184.3) 恣意性に制限を設けるのは、連辞と連合の連帯である。これによりもたらされるのは、単位のごく一部でしかない(▶その価値の一半を授けるのである)。
- (5) (p184.11) ラングの体系全体は、記号の恣意性という不合理な原理に基礎を置いているのだが、この原理は、無制限に適用されると、この上もない錯綜を導いてしまう。しかし精神は、記号の集合体の一定の部分に、秩序と規則性の原理を導入することに成功しており、それが相対的な有契性の役割である。
- (6) (p184.-8) 固有語は、これら2種類の要素を合んでいるが、両者の割合は多様である。無契性が大きいラングは「語彙的(たとえば中国語)」、無契性が小さいラングは「文法的(たとえば印欧祖語、サンスクリット語)と言えるかもしれない。
- (7) 同じ言語の内部でも、有契性から恣意性への、恣意性から有契性への絶え間ない推移がある。ラテン語との関係から見たフランス語の特徴は、恣意性が膨大に増加している。ラテン語では、inimicus <敵の> は、in- <否定接辞> と amicus <友> によって動機づけられる。一方、フランス語の ennemi <敵> は、完全な恣意性を持つようになった。

第7章 文法とその下位区分

第1節 定義; 伝統的な区分

- (1) ラングの状態の記述は、厳密な意味で、かつ日常的な意味で「文法」と呼ぶことができる。

↓ところが

- (2) 伝統的な文法は、形態論+統語論とされている(語彙論は文法には入れられていない)。
 - ・形態論……単語の範疇(動詞、名詞、形容詞など)と語形変化(活用)、つまり単位の形態を取り扱う。
 - ・統語論……単位の機能、形態の用法を取り扱う。

↓しかし

伝統的な区分は、本来的な区別ではない。形態と機能は一体化している。また語彙(の差異)が文法を表すことは多々ある。単位ではない単語は、統語的な事実と区別できない。

第2節 合理的な区分

連辞関係と連合関係の区別だけが本質的

↓

- ・語形変化……連合の典型的な形。
- ・統語論(単語を集団化するための理論)……連辞

↓

連辞と連合の2つの軸上に、文法の材料を配置すること。この配分だけが、共時言語学の枠組みに関して変えるべきものを教えてくれる(この課題にここで取り組むことはできないが)。

第8章 文法における抽象的な実体の役割

[1] (1) (p191.5~7) 連合による「格や品詞」の概念は、抽象的な実体

↓だが、

(p191.13) 基層となる物質的な要素(単語、語幹、接尾辞……)がなければ不可能

(2) (p192.3) 連辞による「語順」の概念は、抽象的な実体

↓だが、

(p192.6) 物質的な単位(単語、語幹、接尾辞……)なくしては存在しない

↓ (1) (2) をまとめると

物質的な要素(単語、語幹、接尾辞……) ⇒ **文法的意味**や**機能**(格、品詞、語順) …… (A)

[2] (p192.-5) 物質的な単位は、**意味**(与えられた機能)によってのみ存在する

↓つまり

物質的な単位 ← **意味**や**機能** …… (B)

(i) この原理(**物質的な単位** ← **意味**)は、**狭い意味での単位**の理解に重要。

↓つまり

音響の断片(シニフィアン) ← **意味**・**概念**・**シニフィエ**…… (C)

(音が分かれて、思考が必要とするシニフィアンを提供する(p158))

[3] (p192.-1) 「これとは逆に、すぐ上に述べたように、**意味**や**機能**は、何らかの**物質的な形態**の支えなしには存在することができない。」

↓

《「これとは逆に」の「これ」は何を指しているのか》

【「すぐ上に述べたように」と書かれていることからすると、「これ」は(B)を指しているはずが、「この原理(A)については、もっと大きな連辞や……に関して定式化したのではあるが」とあるので、「これ」は「もっと小さな」すなわち(C)をも同時に指している。つまり、【単位間(連合・連辞)】と【単位内】の話が混同している。】

[4] (p193.5) 「これら2つの原理を、互いに補完させると、先に単位の境界に関して主張した内容と一致することになる」

↓

【小林訳に「p.146を見よ」とあり、単位の定義(p147.-8)「音響の断片であって、……何らかの概念に対応するシニフィアンであるもの」を指していると思われるが、むしろ[3]の「混同」は、p161の図を想起させる。】